

〈研究論文〉

アートプロジェクトと日中文化交流

— 「大地の芸術祭の里」における「中国ハウス」の事例から —

吉光 正絵*

周 国強†

河又 貴洋‡

はじめに

近年、世界各地からアーティストを招いて作品の展示や制作を行うアートプロジェクトが盛況だ。開催地域の名称を冠した取り組みも多く、アートを媒介にした多様な価値観の創造や新たな社会性の創造、地域活性化や国際的な知名度の獲得が目指されてきた。アーティストが地域に滞在し住民やボランティア、鑑賞者らと共に作品を作り出すことも多く、多様な人々の間にアートを媒介とした文化交流が行われる場としても注目されてきた。地域住民を対象とした調査による地域活性化効果が検証される一方で、海外アーティストらの地域滞在の成果や具体的ななかかわりに関する研究は十分に行われてきたとは言えない。そのため本稿では、海外アーティストらが地域に滞在する間の文化交流について調査結果を元に考察する。具体的には、「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ（以下、大地の芸術祭）」関連プロジェクトの「越後妻有華園中国ハウス（以下中国ハウス）」を取り上げる。

I. アートプロジェクトによる新たな社会性の創発

1. アートによる相互信頼の構築

アートプロジェクトは、広大な自然環境や日常空間に設置された芸術作品を訪れた人々が鑑賞し体験するとりくみである。アーティストが地域に滞在して地域の自然や文化、人々とのかかわりを活かした作品を制作する場合もある。こうした特徴は、アートに触れる場が専門的な展示空間だけではなく生活空間や自然環境であり、「アーティストと様々な人々の参加・協力によって行われる開かれた表現活動」によって支えられていることに根ざしている¹。八田によれば、「アース・アート」、「パブリック・アート」、「オフ・ミュージアム」、「インスタレーション」、「パフォーマンス」など20世紀芸術は、「場」および「人」との関わりを重視する傾向を強め、従来の「作品鑑賞」とは大きく異なる芸術と人々のかかわり方を提起してきた²。アートプロジェクトは、上記のような現代芸術の結実点でもある。地域に滞在したアーティストが住民や鑑賞者と共に作品を作り出すことで、アートの

*長崎県立大学国際社会学部准教授

†長崎県立大学国際社会学部准教授

‡長崎県立大学国際社会学部准教授

ト、ボランティア、住民、鑑賞者らの間でアートを媒介とした新しいコミュニケーションを生み出すこと自体も一つの目的となる。アートが媒介となることで、「既存の回路とは異なる接続／接触のきっかけ」を作り出し、「新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動」ともなっている³。

アーティストたちの作品テーマは、開催地域の文化や伝統、個性の尊重と理解に重点が置かれているため、滞在中は住民と様々なかかわりを持つ必要があり、アーティストの個人的な表現活動として完結しているわけではない。こうしたアートによって触発された新たなコミュニケーションの回路は、アーティストと住民との間、住民と住民の間、ボランティアや作品鑑賞に訪れた訪問者らなど多様な人々の間に「社会的ネットワーク活動」を生み出す。このような社会性について、野田は「その協力関係の構築はお互いの『相互信頼』を形成し、アーティストの地域での活動に対する住民の共感が『互酬性』を生む」と考察している⁴。アーティストたちが、地域に一定期間滞在することで、住民との間に人間的なコミュニケーションが構築され、互いの文化を乗り越えた相互信頼が生み出されていると考えられる。

2. アートプロジェクトの国際性

アートプロジェクトの多くは海外アーティストの作品展示やアーティストの招聘が行われる国際展でもある。こうした国際展の開催には、「世界的視野の中でその開催地の存在をアピールする」ための「まちおこし」効果への期待もこめられている⁵。一方で、海外からアーティストを招くことによる価値の多様化も意識されている。多数の国際的なアートプロジェクトを手がけてきた北川フラム氏は、異文化体験の「こ

わさ」による「好奇心」や「知りすぎた日常」を超える力の必要性を指摘する。そして、「外国の人が妻有の人たちをゆたかに開いていってくれている。(中略)多様性の許容、多様性こそがもつ可能性に気づかせてくれました。これは今、日本と世界に支配的な価値である単純な同一性とはまったく違う方向であり、『美術』がもつ根底的なものだと思います」と、アートプロジェクトが多様な国や地域とつながりをもつことの重要性を指摘している⁶。

一方で、中山間地域や島嶼など地理的・自然的制約をもつ条件不利地域で「国際展」を開催することによる効果も示唆されている。李美那は、都市から離れ交通が不便な中山間地域で開催される「大地の芸術祭」では「ことさら異文化とか多文化とか言う必要はない。妻有に行くと、外国の作家であることに誰も驚かない。(中略)すべてが、異質なものをどう受け入れるのかということの実践」になっていると記している⁷。ここでは、開催地の条件不利性の高さが、国籍、言語、民族、世代、階層、居住環境といった既存概念によって規定される文化差を異質多様な価値観の自然な受容を促していると考えられる。

II. 「大地の芸術祭」による地域活性化と国際化

1. 「大地の芸術祭」の概要

本稿でとりあげる「中国ハウス」は、「大地の芸術祭」の関連プロジェクトである。公式HPによると、「大地の芸術祭」は、「人間は自然に内包される」を基本理念として2000年から3年に1度開催されてきた世界最大級の国際芸術祭である。会場は、越後妻有1市1町で面積は760 km²（新潟県十日町市・津南町）である。総面積

760kmにおよぶ1市1町の全域で、その中に330点の作品が点在しており、その中に息づく200余りの集落の存在が重要である。2015年は7月26日から9月13日までの50日間開催され、35の国と地域から約350組のアーティストが作品を展示し約51万人の来場者数があった。約50億円の経済効果や雇用・交流人口の拡大をもたらした⁸。海外アーティストらの現地での制作活動は、越後妻有アートネックレス整備構想制定の年で第一回開催の3年前の1997年からであった⁹。「大地の芸術祭」は3年に1回開催されるが、芸術祭会期中だけでなく年間を通じた越後妻有の地域づくりも熱心に行われている。芸術祭が開催される期間以外にも様々な活動が行われており、これらの活動の舞台となる越後妻有地域を総称して「大地の芸術祭の里」と呼んでいる。現地で「お祭り」とも呼ばれる季節毎の集中期間（2週間ほど）には、各施設での特別企画展やアーティストによるワークショップ、イベント、パフォーマンスなどが連動した大規模な企画が実施されている。回数を重ねるごとに、会期と会期の間をつなぐ継続的な活動にも重点がおかれるようになってきた。第3回展からは「家」がテーマの一つとなり、「空き家プロジェクト」が実施されてきた。空き家や廃校を「地域文化の結晶」「地域にとってかけがえない文化遺産」と捉え、作品設置の場所としてだけでなく、オーナーを募集して多様な目的に対応する場所へと変えていこうとする営為である。これまでに100以上のプロジェクトが生まれ、都市に住む個人や学校、文化機関、企業からオーナーを募り、会期後も維持・活用されている¹⁰。諸外国との恒常的な交流拠点としては、2009年にオーストラリアハウスが誕生した。オーストラリア大使館、豪日交流基金、新潟県の助成を受け、社団法人海外と文化を交流

する会が協賛している。アーティストインレジデンスとして滞在利用されていたが、2011年3月の長野県北部地震で全壊し、再建後の2012年からは一般向けの宿泊施設として利用されている。

2. 「大地の芸術祭」の実際の効果

「大地の芸術祭」では、実際の効果を検証するための調査も行われている。主催者らによる作品設置集落や町内の代表者へのアンケート調査も実施されている¹¹。その結果、アーティストや都市圏から参加した若者ボランティアとの交流、鑑賞者らの訪問によって「地域の賑わい」が生まれたこと、「地域内の人間関係」の深まりや「地域の活動」の活発化が良い結果として認識されている。また、交通混雑や来訪者のマナーの悪さなどが、地域にとってマイナスになった点として意識されている。松本らが実施した、集落の区長を対象にしたインタビュー調査の結果では、地域住民の間にソーシャルキャピタルが形成されたことが指摘されている¹²。勝村らの作品が設置された集落住民への悉皆調査によれば、「具体的な変化はない」が半数以上ではあるものの、「地域での話題が増えた」という意見も半数弱ある。そして、肯定的変化の原因として、アーティストやボランティアの熱意が挙げられ、地域の内部や外部の人びとの交流の活発化が最大の成果として意識されていた¹³。アートプロジェクトの最大の効果は「交流の文化」であるが、その成功には、住民の日常生活の阻害や侵害に関するアーティストや観光客の配慮やマナーが不可欠である¹⁴。一方で、海外アーティストとの交流や効果についての十分な検証は行われていない。そのため、以下ではその点について、大地の芸術祭に関連した「中国ハウス」プロジェクトを具体的な事例として

考察する。

Ⅲ. 「中国ハウス」における文化交流

1. 「中国ハウス」プロジェクトの概要

本稿がとりあげる「越後妻有華園中国ハウス（以下中国ハウス）」は、2016年8月8日にオープンした十日町市室野集落の空き家を利用した中国アーティストのレジデンス施設である。日本と中国を文化でつなぎ、日本文化をアジアへ発信していくこと、中国の文化を日本に紹介することを目的として運営されている。中国のアートをベースにした展覧会や、舞台、民芸交流などが、季節ごとのイベント集中期間に継続的に開催されている。ここに滞在した中国のアーティストたちの作品展示やワークショップなどの活動は、奴奈川キャンパスで行われている¹⁵。奴奈川キャンパスとは、2014年3月に閉校した奴奈川小学校の再利用施設で近隣住民やボランティアから構成されたNPOによって運営されている。農業をベースに、地域・世代・ジャンルを超えた多種多様な人たちが地域の価値を実践的に学ぶ学校として想定されている¹⁶。

2. 調査概要

ここでは、「大地の芸術祭」に関連して中国アーティストらによって実施される「中国ハウス」プロジェクトのプロデューサーらがまとめた冊子の内容とインタビュー調査から、海外アーティストの地域とのかかわりや創作活動への地域からの影響について検証する。

インタビューは、「中国ハウス」を運営している瀚和文化（HUBART）の理事長の孫倩氏を対象に日本語で実施した。日時は8月11日午後3時から5時までで、場所は、孫倩氏の連携

オフィスの一つでもある梁啓超書斎（北京市東四十四条東口内北溝沿胡同52号）である。故宮の東に位置する胡同にあり観光スポットとしても重要な場所に指定されている。梁啓超は、日本で長期の亡命生活を送ったこともある清末民初の政治家、ジャーナリスト、歴史学者である¹⁷。以下では、孫倩氏へのインタビュー結果と、孫倩氏編集の『華園通信七月節專集』及び『華園通信第二号』に収録されている記事を中心に考察する。

3. 「中国ハウス」の誕生

瀚和文化（HUBART）は、「大地の芸術祭」の中国向けプロモーション、「中国ハウス」の運営、北京大学、清華大学、中央美術学院の講演会のアレンジ等の業務を行う民間企業である。理事長の孫倩氏によれば、以下の経緯で「中国ハウス」は誕生した。

オーストラリアハウスを見て、チャンスがあれば中国ハウスを作りたいと思ったのがきっかけです。中国の作品を通じた交流をしないと、北川フラム先生のアートフロントギャラリーの上海事務所を通して交渉しました。中国の若いアーティストは、外国のアーティストの良い作品を見て勉強になるし。彼らを連れて行ってそこで創作させて展覧会を開くための古い建物を探していただきました。その結果、小学校の廃校を利用した「中国ハウス」が誕生しました。

「中国ハウス」プロジェクトは、アート関係、企業関係、政府関係のネットワークで実施しており、現在までに30人くらいのアーティストや建築家を中国から招聘している。大掛かりなプロジェクトとしては、馬岩松氏の清津トンネル

の現地視察と創作がある¹⁸。馬岩松氏は、ジョージ・ルーカス発案のナラティブ・アートミュージアムなど世界各地で巨大文化施設や高層タワーを設計してきたMADアーキテクツの代表である¹⁹。

4. 中国アーティストの創作活動と地域住民との交流

(1) アートによる国を越えた一体感の創造
「中国ハウス」の第一回プロジェクトとして、「大地の芸術祭の里」の夏祭り期間（夏季イベント集中期間である2016年8月6日から2016年8月21日）に「華園七月節」が実施された。「七月節」とは、収穫を祝う重要な農耕儀礼の立秋節の中国での呼び名である。日中両国の人びとが芸術を通じて交流し、一緒に収穫の喜びを分かち合うことを意図して命名された。ネットニュースによると、式には北川フラム総合ディレクター、中華人民共和国駐新潟領事館の何平総領事（当時）、十日町市の関口芳史市長のほか、室野地区の関係者ら約100人が出席した。何平総領事は挨拶の中で、「アートベースの設立の歴史において、この華園は中国の企業が日本で行う、初めての試みだ。両国の政治的關係にいざこざが続く中で、文化と芸術を通しての交流こそが、相互の理解を深め、感情を増進する良い場となる」とプロジェクトの意義を高く評価している²⁰。また、室野区の佐藤達夫区長は、「中国のアーティストはここに駐在して、現地の住民たちと交流しながら作品を作っています。私たちは一對一の交流を非常に期待しています」と述べている²¹。隣国關係の悪化が喧伝される昨今の風潮を超えてアートを介した草の根の交流が期待されていることがわかる。

「中国ハウス」のオープニングセレモニー

のために邬建安氏の作品「五百筆」の「三傘屏風」が制作された。孫倩氏によれば、「会場でご来賓に一筆書をしてもらい、物凄く大きな作品になりました」とのことである。邬建安氏は、参加者全員が書き下ろした筆画が一体になって「永遠」に残る美しい作品が誕生したことに感銘をうけた²²。ここでは、食事やお茶といった生活文化を介した交流も行われた。中国の有名キャスターの曹滌非氏とデザイナーの何海洋氏による「貼秋膘」をテーマにした中国料理がふるまわれた。「貼秋膘」は、立秋の節季に健康を祈る儀礼にちなんだ飲食と贈答品を贈る伝統行事である。ここには、「人と自然の融合を意味する『天人合一』の精神を、長くこれからの世代に受け継ぐことにつながれば」といった願いや「祝福を分かち合う印」がこめられた²³。また、瑠璃芸術家で茶人の梁明毓氏による手作りの瑠璃の茶器を用いた「奉茶の礼」が行われた。梁明毓氏は「美は二つ国で同じ縁になる・・・」と題して、茶席が「奴奈川キャンパスとの対話」になりコミュニケーションの場になることを祈念した²⁴。以上から、「中国ハウス」のとりくみは、アートを介した住民とアーティストらとの対話と交流を志して誕生したことがわかる。

(2) 郷土と自然がアーティストに与える力

「中国ハウス」は、オープンイベント後も様々なプロジェクトを開催し、多数のアーティストを招聘してきた²⁵。

「華園」設立から今まで、約30名の青年アーティストが越後妻有にたどり着いた。大地の芸術祭を見学、理解したうえ、ここで駐在しながら創作活動をする。住民たちと一緒に何日間か生活する。交流しながら

体験して、作品に新たな思考を与え、違った国へのふれあいができた。

上記から、地域との交流によって新たな芸術表現が生まれる等、アーティストにとっても良い成果が得られていることがわかる。「大地の芸術祭の里」の春祭り期間（春季イベント集中期間である2017年4月29日から2017年5月7日）に行われた展覧会として「自然而然」がある。「もう一度わたしたちの心に帰れ、大自然とのそして同じ人間とのほころびた関係を修復せよ！」といったメッセージを提唱する企画だ²⁶。「自然而然」キュレーターの楊小波氏は、展覧会について以下のように記している²⁷。

自然を利用して歴史の感情を探していくことを明瞭にしました（中略）。展覧と郷土が関連を持つ。展覧の力で郷土に前向きな行動力を与えられる。大勢の人々に郷土のことを理解してもらえる。もっと楽しい生活ができる。郷土は都市の精神避難所になり、生活を体験できる一隅になり、創作者にとって更に得難い芸術経歴や希少な芸術理解の経験をもたらす。

ここから、郷土をテーマにした展示を行うことで、都市と地方との文化交流が生まれ、都市からきたアーティストらや鑑賞者、地域住民の双方にとっての良い効果が企図されていると考えられる。

「自然而然（自然のまま）」の展示の一つに、「光陰寺」がある。これは、太陽光の移ろいによって「心経」の文字が描かれた266枚の鏡の反射光が「时间愉快的过去了」という八文字の漢字をバラバラに描き出す作品である。この八

文字は同時に出現しないため誰も読むことはできないが、その現れ方こそが「今日の世界を認識する方法そのもの」を表現している。作者の王茂氏は、この作品の制作状況について以下のように記述している²⁸。

白い雪、飛ぶ鳥、融けた雪、白い花を見ながら、坂本龍一の音楽と川の流れる音を聞き、テラスで仕事をやる。まるで映画に出てくるアーティストのようでした。（中略）アーティストとして、このような環境で仕事を続けられてとても幸せでした。北京では絶対できないでしょう？この環境で全然疲れを感じなくて、まるで二十歳に戻ったようです。身体に前向きな原動力があって、次々と仕事への期待ができてきます。毎日、とても長く仕事することができます。

ここでは、豊かな自然がもたらすシアトリカルな環境がアーティストを高揚させ制作に新鮮な喜びを与えている。孫倩氏も、「中国側のアーティストは都会の人なので忙しい。田舎に行くと心が静かになり得る物が多い。素朴な感情が発見できる」と、自然豊かな田舎暮らし体験が都市在住の芸術家の創作活動にとって非常にプラスになっていることを指摘する。

(3) 地域との日常的な交流によって誕生したアート作品とアーティスト

「中国ハウス」では、アーティストたちの生活を整えるボランティアスタッフも滞在している。中国側のボランティアスタッフのEico氏は、2017年の「春祭り」の事前作業のために娘の福気ちゃんと共に北京から来訪した。娘の集落での暮らしを撮影してアップしたWe Chat

の写真が好評だったことから展覧会をすることになり、アーティストになった²⁹。

室野の古屋、庭先の花草、奴奈川小学校のグラウンド、松代往復のバス、爺ちゃん婆ちゃんがくれたプレゼント…中国の友人たちは福気ちゃんから室野のことを知っていました。福気ちゃんの姿はまるで窓のよう、この「窓」を通じて生活の場が違う両国の人々が繋がっていました。Eicoは新しい称号—華園駐在アーティストを手に入れました。私たちは福気ちゃんの写真の展覧会を、福気ちゃんが上った窓のある教室を会場に行きたいです。

孫倩氏がEico氏の写真を常設展示に加えた理由は、「若いお母さんが子どもを連れて、田舎に泊まり、写真を撮影し、感動の連鎖と堆積を産み出したこと自体が意義深い」からである。写真展に置かれた自由メモには、「福気ちゃんはどんな親善大使よりも良い」など、地域住民からの心温まるメッセージがたくさん残されていた。孫倩氏によると長期滞在の間には、近隣の住民たちと以下のような日常的交流があるとのことである。

村に行った時に、「生の中国人と生の中国語に出会うとテレビで見ている中国人や中国語と違う」と言われました。Face to Faceの交流は、お互いにわかりあえる。近所の方々が自分で作った果物や花を差し入れにきて下さるので、中国人参加者の側も宿泊所でお茶会を開催し、中国から持参したお菓子をふるまいました。「中国ハウス」を訪れてくれる日本の方々もだんだん増えています。

このように、日常的な暮らしの中での対面的接触の積み重ねによって、国や文化、地域、世代の違いを乗り越えた多様な信頼関係が育まれていることがわかる。展覧会のアシスタントをしている黄糶氏は、言葉ではない挨拶による交流の満足感を記している。

日本はとても礼儀を凝る国です。集落で知るとか知らないとかにかかわらず、住民たちが頭を下げてうなずいて挨拶をしてくれます。私と兄が日本語を喋れないので、英語でさえ老人たちとは交流ができなくて、微笑むことしかできないです。しかし住民たちの暖かさを感じています。あるおばあちゃんは私たちに話かけてくれましたが、全然分からなくて。最後に笑いながら「頑張って」と言ってくれましたがとても可愛かったです。

以上のように、海外アーティストやスタッフらが地域に暮らす中で、様々な形の交流が生まれていることがわかる。他にも、3週間程度の滞在期間に現地の物を使って作品を制作する試みや、似顔絵を描き合うプロジェクトなどもあり、アーティストと地域住民との交流が意識されている。先行研究では、アートプロジェクトのネガティブポイントとして、地域住民の暮らしの侵害があげられていたが、それらの点についての配慮も十分に行われていた³⁰。

私たちはできる限り自然の環境で創作して、できる限り集落のルールを守って、できる限り各国のアーティストのアートの栄養を学んで、できる限り素晴らしい作品などをここの皆さんに分かち合いたいと思います。

孫倩氏に「日本で滞在していて困ったこと」について聞くと、「ゴミの分別が難しいです。毎回協力しています」と答えがあったが、他には特にないとのことであった。今後の展開について聞くと、中国の一般家庭の子どものスタディツアーや観光ツアー、「大地の芸術祭」参加アーティストの作品の中国での展示などを予定しているとのことであった。中国では芸術熱が高まっているが、「大地の芸術祭」のように地域を舞台にした大規模なアートイベントについては、「国の情景が違うのでやり辛いです」とのことであった。「中国ハウス」プロジェクトの最大の成果としては、「アートを通じた人間と人間の交流によって人々を感動させることができたことが意義深い」とのことであった。

以上のように、中国のアーティストやスタッフたちは地域に滞在し、豊かな自然や地域住民とのふれあいによって新たな創造性を開花させていることが明らかになった。

おわりに

本稿では、近年日本各地で開催されているアートプロジェクトで育まれている多様な文化交流の実際について事例を元に考察した。具体的な事例は、新潟県の中山間地域で行われている「大地の芸術祭」関連プロジェクトの「中国ハウス」である。その結果、「中国ハウス」プロジェクトを通して、日本と中国、都市と地方、子どもや若者と高齢者といった固有の文化や立場を乗り越えた交流が日常的に行われていることがわかった。そして、中国の都市部から来訪したアーティストたちは、地方の豊かな自然に囲まれた暮らしの中で地元の人々と普通のつきあいをすることで、新たな創造性を発見し成長していた。ボランティアとして参加していた若

い主婦が娘の日常を写真に撮ることで、アーティストとしての自分を発見し、日中両国の人々の文化の乗り越えに大きな役割を果たすといった成果もあった。そして、これらの成果は、地域の自然や暮らし方へのきめ細やかな配慮によって成し遂げられていたことがわかった。今回確認できた文化や慣習の乗り越えによる国家や言語、世代を越えたコミュニケーションや信頼の獲得は、中山間地域特有の地理的・自然的制約が生み出す条件不利性が大きな影響を与えている可能性も考えられる。これらの点については、都市地域で開催されているアートプロジェクトとの比較などによって今後検証していきたいと考えている。

注

- 1 橋下敏子(1997年)『地域の方とアートエネルギー』学陽書房、20-24ページ。
- 2 八田典子(2004年)「『アートプロジェクト』が提起する芸術表現の今日的意義-近年の日本各地における事例に注目して」『総合政策論叢』第7号、島根県立大学総合政策学会。
- 3 熊倉純子監修(2014年)『アートプロジェクト-芸術と共創する社会』水曜社、9ページ。
- 4 野田邦弘(2011年)「現代アートと地域再生-サイト・スペシフィックな芸術活動による地域の変容」『文化経済学』第8巻第1号。
- 5 八田典子(2007年)「芸術受容の『場』の変容-『大地の芸術祭』に見る『展覧会』の新しいかたち」『総合政策論叢』第7号、島根県立大学総合政策学会、133ページ。
- 6 北川フラム(2015年)『ひらく美術-地域と人間のつながりを取り戻す』ちくま新書、131-132ページ。
- 7 八田典子(2007年)140ページ。
- 8 「越後妻有大地の芸術祭の里公式HP」(<http://www.echigo-tsumari.jp/about/>) 2018年1月31日最終確認。
- 9 寺尾仁(2014年)「大地の芸術祭と人々-住民、こへび隊、アーティストが創り出す集落・町内のイノベーション」澤村明編著『アートは地域を変えたのか-越後妻有大地の芸術祭の13年:2000~2012』慶應義塾大学出版会株式会社、127ページ。
- 10 「越後妻有大地の芸術祭の里公式通年の取り組み」(<http://www.echigo-tsumari.jp/about/approach/>) 2018年1月31日最終確認。

- 11 北川フラム(2010年)『大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2009』現代企画社。
- 12 松本文子・市田行信・水野啓・小林慎太郎(2005年)「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』19ページ。
- 13 勝村(松本)文子・田中鮎夢・吉川郷主・西前出・水野啓・小林慎太郎(2008年)「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因-大地の芸術祭妻有トリエンナーレを事例として」『文化経済学』第6巻第1号。
- 14 中島正博(2012年)「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり-アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質」広島県立大学、18ページ
- 15 「中国ハウスプロジェクト七月節」(<http://www.echigo-tsumari.jp/uploads/calendar/10080.pdf>) 2018年1月31日最終確認。
- 16 「奴奈川キャンパス」(<http://www.echigo-tsumari.jp/facility/base/nunagawa>) 2018年1月31日最終確認。
- 17 狭間直樹(2014年)『梁啓超一東アジア文明史の転換(岩波現代全書)』岩波書店
- 18 『華園通信第二号』36ページ。
- 19 「中国建築界の雄 MAD Architects の馬岩松が目指す「天空の革新」」(<https://www.axismag.jp/posts/2017/09/81392.html>) 2018年1月31日最終確認。
- 20 CRI ONLINE「中国総合アート展、大地の芸術祭の里で開幕(新潟)」2016-08-12(apanese.cri.cn/2016/08/12/162s252344.htm) 2018年1月31日最終確認。
- 21 「華園へのメッセージ」華園通信編集部『華園通信第二号』7ページ。
- 22 邱建安「奴奈川華園七月」華園通信編集部『華園通信七月節専集』26ページ。
- 23 曹滌非、何海洋「秋膘職案」華園通信編集部『華園通信七月節専集』27ページ。
- 24 梁明毓「美は二つ国で同じ縁になる」華園通信編集部『華園通信第二号』29ページ。
- 25 「交流 私は越後妻有にいます」『華園通信第二号』25ページ。
- 26 中国ハウスプロジェクト「自然而然(自然のまま)」(http://www.echigo-tsumari.jp/calendar/event_20170429_0507_04) 2018年1月31日最終確認。
- 27 楊小波「郷土」『華園通信第二号』26ページ。
- 28 王茂「毎日仕事する時間をなるべく長くしてほしい」『華園通信第二号』27ページ。
- 29 「『華園』芸術駐在プラン Eico: 福気ちゃんは空野にて」華園通信編集部『華園通信第二号』20-21ページ。
- 30 「芸術 人之常情」『華園通信第二号』16-17ページ。

参考文献

- 勝村(松本)文子・田中鮎夢・吉川郷主・西前出・水野啓・小林慎太郎(2008年)「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因-大地の芸術祭妻有トリエンナーレを事例として」『文化経済学』第6巻第1号。
- 北川フラム(2010年)『大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2009』現代企画社。
- 北川フラム(2015年)『ひらく美術-地域と人間のつながりを取り戻す』ちくま新書1135
- 熊倉純子監修(2014年)『アートプロジェクト(芸術と共創する社会)』水曜社。
- 澤村明編著(2014年)『アートは地域を変えたのか-越後妻有大地の芸術祭の13年:2000~2012』慶應義塾大学出版会株式会社。
- 中島正博(2012年)「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり-アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質」広島県立大学。
- 野田邦弘(2011年)「現代アートと地域再生-サイト・スペシフィックな芸術活動による地域の変容-」『文化経済学』第8巻第1号。
- 橋下敏子(1997年)『地域の力とアートエネルギー』学陽書房。
- 八田典子(2004年)「『アートプロジェクト』が提起する芸術表現の今日的意義-近年の日本各地における事例に注目して-」『総合政策論叢』第7号、島根県立大学総合政策学会。
- 八田典子(2007年)「芸術受容の『場』の変容-『大地の芸術祭』に見る『展覧会』の新しいかたち-」『総合政策論叢』第7号、島根県立大学総合政策学会。
- 松本文子・市田行信・水野啓・小林慎太郎(2005年)「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』。

付記

この研究は、平成29年度学長裁量教育研究費の助成を受けて実施した研究成果の一部である。